

PICK UP MOVIE

『正義の行方』

10/11~

[2024年/日本/158分]

監督：木寺一孝

司法の 深い闇



1992年、福岡県飯塚市で小学1年生の少女2人が登校途中に拉致され殺害された。DNA型鑑定などによって久間三千年が犯人とされ、2006年に死刑判決を受け、その2年後に異例の速さで死刑が執行された。遺族と弁護団が再審請求を起している。久間三千年はほんとうに犯人だったのだろうか。

事件からすでに30年が過ぎた。この作品では死刑囚の遺族、元捜査一課の刑事たち、弁護士たち、新聞記者たちが事件について語っている。彼らの率直な語りを引き出し、表情や生活のようすまで生き生きと捉えているのが、作品の魅力だ。また過去のニュースの音声や報道映像が効果的に使われ、それぞれが語る物語に思わず引き込まれる。

なかでも捜査や取り調べに関わった警察関係者の話には驚かされた。日常の職務だけに語り口は滑らかだ。だからよけい多くの疑問が浮かぶ。たとえば、久間三千年は逮捕直後の取り調べでは雑談にも応じていたが、あるときから口を閉じ一貫して犯行を否認したという。だがどのような取り調べが行われたかは、一切知ることができないのが日本の現状だ。だから最重要人物・久間三千年については、この映画を見たあとも曖昧模糊としたままだ。さらに元捜査一課長の言葉には、背筋が寒くなる。彼は、少しでも速く犯人をあげるために違法すれすれの捜査をする、と自分の手腕を自慢げに語っている。

久間三千年を死刑に処す重要な証拠とされた当時のDNA型鑑定は、角度も低く、裁判で提示された鑑定結果は改竄さえ疑われるものだった。弁護団によるこれらの申し立てに裁判所はどんな対応をしたか、映画でじっくり見て欲しい。

だが特筆すべきは、事件を報道した地元の西日本新聞が、2017年になって事件の検証記事を連載したことだ。というのも、事件報道に携わった記者が、他社よりも早く特ダネをとの思いに駆られ、結局は警察取材だけで記事を書き、頭に浮かぶ疑問にも蓋をしてきたことに、慙愧の思いを抱えていたからだ。2年にわたる検証記事連載を終えた彼らがどんな思いを吐露するか、これも映画で見たい。

監督は、登場人物の誰とも等距離を取ろうとしたという。だからこそこれだけ多くの関係者が赤裸々に自分と事件の関りを語ったのだろう。そしてその結果浮び上がるのは、これほどのあやふやな証拠をもとに人の命を抹殺してしまう、この国の怖さではないだろうか。

プロフィール

田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。